

コラム⑤

海洋と環太平洋・島嶼を視野におさめた 次世代の研究計画に向けて

——総括討論の司会をつとめて

稲賀 繁美

小説家の梶山季之は1975年、構想中の『積乱雲』の取材中、香港で客死を遂げた。実現はしなかった小説だが、韓国の植民地遺産、ハワイ移民をはじめとして太平洋全域を横断する diaspora、さらには Hiroshima と原子力問題といった話題を集約しようとの野心を秘めた大作だった。それは現在から振り返れば「環太平洋」を視野に収めた構想であり、植民地・朝鮮に生を受けた作家ならではの問題意識も鮮烈である。その梶山の蔵書7,000冊以上が、ハワイ大学に寄贈されている。たとえばこれを中心として、小説研究者や、植民地行政研究者にとどまらず、さらに多くの学術分野を交錯させた研究会を実施するという計画はいかがだろう。題して“Trans-Pacific Colonial Experience around the Kajiyama Archives”。

1 海外シンポジウムの沿革・鳥瞰と反省

日文研は、創立30周年を2017年に迎えた。国内で実施する「国際シンポジウム」とは区別して、海外で実施する「海外シンポジウム」を初期から実施してきた。その総括も必要なはずだが、大まかに見れば、最初の10年は「キャラヴァン・シンポ」の愛称のもとに、いわば各個撃破で、地域別の開

催により、欧州、トルコ、北米などを行脚して、現地の日本研究者との交流を促進し、「日文研」活動の基礎となる国際的な信頼を築いた。これに遅れつつも並行して、AAS (Association for Asian Studies)、EASJ (European Association for Japanese Studies) といった団体と共催あるいは協賛の形で、その年次大会や総会開催に合わせ、各地の軒先を借りるような形で、学術交流を促進した。欧州ならばブダペスト、ラハティ、ワルシャワ、コペンハーゲン、ブカレストほかの開催地が挙げられる。さらに未着手の地域として残っていた、中東圏ではカイロやアレクサンドリア、却って手薄になっていた北米ではバンフ、またサン・パウロやリオ・デ・ジャネイロなどの南米圏にも交流の網目を広げた。

創立から20年も経過すると、日文研側も相手側も世代が交代する。第2ラウンドの世界巡行が必要という声もあれば、専任教員や海外からの客員研究員の特技や本務先との関係を利用した相互扶助の体制も整ってくる。南米の場合を指摘したが、ハノイやシンガポール、ニュージーランドでの開催や、近年のドイツ語圏での企画も、好例である。AASの年次総会は毎年開催地が移動するが、ホノルルは頻繁に利用される土地であり、ロッキー山脈ふもとのデンヴァーや、隣町のボウルダーは、第二次世界大戦後、日本研究者として名を遺した多くの北米出身者が、戦時下に日本語教育を受けた土地であり、その活躍の場は太平洋の島嶼や沿岸にも広がっている。ハワイと東京とを往還したサイデンステッカーも、その典型のひとりだろう。

2 半島研究、島嶼研究への志向

カナダのバンクーヴァーは新渡戸稲造を記念する公園を擁するが、キンヤ・ツルタを顕彰する学会がこの地で開かれた頃から、筆者はすでにこの25年ほど、太平洋島嶼部の連絡網に立脚する、あらたな構想のシンポジウムを、機会あるごとに提唱してきた。今回、「環太平洋学術交流会議」という形で、その試みの第一歩が実現に至ったことを、寿ぎたく思う。

だが、これはまだ一般的交流の魁さきがけに過ぎまい。90年代末当時は折から香

港の中国返還を控えて、バンクーヴァーには華僑人口が急増している時期であった。太平洋を跨ぐ移民状況の把握は、国際的な視野から見た日本研究にとっても他人事ではない。ハワイに目を転ずれば、日本から北米に留学する多くの社会学者は、1990年代には、フィールド・ワークとしてハワイの日系移民の聴き取り調査を基礎にして博士論文を仕上げる例が頻出した。こと移民となれば、その国際比較が、環太平洋圏の事情を浮き彫りにするにも、不可欠だろう。サン・パウロのリベルダージ地区の日本人街は、現在では華僑や韓国系の移民のほうが優勢といってよい状況を呈しており、ロス・アンジェルスのリトル・トーキョーは80年代以降の韓国人社会の圧倒的発展を前に、すっかり昨日の威光を失っている。日本か韓国か、中国か、などといった狭い料簡ではなく、これら複合事例の比較研究は移民状況の生態研究にとって必須であるはずだ。それは筆者が北欧のNAJAKS (Nordica Association for Japanese and Korean Studies) に何度か招かれ、key note 講演などを行うたびに、痛感した実態である。世界各地に点在する「移民コロニー」という「島嶼」を繋ぐ交流網を世界大で鳥瞰しつつ、現場の生活に密着して観察することは、翻って海洋に点綴する島嶼文化の実相を映し出す。

3 海洋交易網への眼差し

環太平洋各地に文字通り環状に分布する都市群を縦横に結ぶ交通網や物資流通網は、実際には人類の生存の基礎をなす。日本列島についてみると、現在なお積載重量で見た場合、物流の99.6%は海路に頼っている。航空機による旅客運搬が主流となって半世紀を経た現在では、船舶はほとんどの人々にとって極めて縁の薄い交通手段となってしまった。だが船舶による世界航路網は、人類の移動経験の過去から将来を考えるうえで、決定的な役割を担っている。歴史以前の時代に、東南アジアから島嶼伝いにメラネシア・ミクロネシアからポリネシアに至る太平洋圏全域に人々が移住していった展開に始まり、これらの島嶼間を天測により丸木舟で自在に航行した人々の知恵、それより遥かに幼稚な航海術で同じ海域に侵入し、海賊行為により土地と住民

を取奪した南欧勢力による、トリデシリヤス条約に始まる、地球を二分する争奪戦。

インドのゴアからバタビア、さらにはマカオを経由するポルトガル植民地の点綴は、現在にまで継承されている。それに対抗したスペイン勢は「新大陸」西岸から太平洋を西航して、フィリピンを手中に収める。その命名はフェリペ2世に由来するが、彼の没年は豊臣秀吉のそれと同じ1598年。台湾・台南のゼーランディア城や北部淡水の紅毛城では、朝鮮出兵の秀吉による侵攻が、現実の脅威だった。天正の少年使節は西周りを最初に経験した日本人だったが、支倉常長の使節はスペインのガレオン船が開発したマニラとアカプルコを結ぶ大圏航路に便乗した経路をとり、メキシコの地峡内陸のプエブラ付近を横断してベラクルーズから大西洋を渡った。遠藤周作の『侍』が描くとおり、支倉一行が到着してみると、そこにはすでに日本人流民が棲息し、のちに宮澤賢治が詩に詠むポポカテペトル火山は、すでに「メキシコ富士」の異名をとっていた。

4 移民動態の現場

遠洋航海は海上覇権の掌握と密接に絡まるが、同時に疫病を世界的に伝播させる媒体ともなる。本阿弥光悦は、「大航海時代」に南蛮より齎された梅毒に侵されたとも推測される。宗達の著名な《風神・雷神》の左右の屏風の中央には不思議な空隙が広がるが、それは光悦追善のため、死の床に配された一対の屏風だったからではないか、との仮説すらある。19世紀になれば『白鯨』のハーマン・メルヴィルが『ティペー』ほかの作品で描写したとおり、ポリネシアの東端・タヒチでは肺結核や性病が猖獗を極め、先住民の人口は激減し、世紀末にポール・ゴーガンが終の棲家を求めた頃には、首邑パペーテは文字通り「失楽園」(paradise lost) の惨状を閲していた。世界に点在するサンゴ礁の楽園群も、この試練から無縁ではない。

ここに、移民の移動手段である移民船の生態が浮上する。戦前の南米移民は、多く大阪商船がそれを担ったが、この航路開削に貢献した森勝衛船長と

いえば、日本海運史に名を遺す英傑であり、筆者もその晩年に訶刺に接した経験がある。アパルトヘイトに反対したウィリアム・プルーマーとローレンス・ヴァン・デル・ポストを、独断で船客として日本に連れ帰った「かなだ丸」。その船跡は南アフリカと日本の文化交流において、欠くべからざる一章をなす。アラビア海からインド洋に至る若き日の航海が、日本への initiation だった様子は、ポスト晩年の自叙伝に活写されている。その大阪商船は大連航路によって、満洲移民の大動脈ともなり、南米航路に加えハワイ移民にも深く関与する。点を線で繋ぐ相互交流ではなく、運航路の網目を多面体として捉える発想の位相転換が、海洋・島嶼研究には不可欠だろう。

5 航路系譜の文化史

海上航路伝いの寄港地体験は、近代の世界体験に雛形を提供する。航空機による目的地との直接往来とは異なり、船旅は中継地の風光や情緒を垣間見る機会を恵む。欧州航路をとってみても、進むにつれ大英帝国の威光がいや増す西周り、西海岸から大陸横断鉄道を利用して新興北米合州国を実地体験する東周りとは、見聞の質が大いに異なる。西周りで倫敦に到着して神経衰弱に苦しんだ夏目漱石と、東周りでキューバにも立ち寄り、大英博物館で勇名を馳せた南方熊楠と。両者同年生まれだが、渡航時の年齢の違いも手伝って、ふたりの英京体験は対極をなす。赤道通過では「赤道祭」が挙行されるが、北半球から南半球への通過は、未知の進路への希望で盛り上がるが、北半球への回帰にはなぜか憂情が漂うという。和辻哲郎の『風土』や、プエノス・アイレスでの国際ペンクラブ参加のため、移民船の世界一周航路を夫妻で辿った島崎藤村らの体験も、あらためて環太平洋文化史の中に位置付けたい。

福島が日本列島における原子力発電事業開発の拠点となったのも、太平洋と密接にかかわる。常磐地域は、世界最大の首都都市圏の後背地だった。炭鉱が閉山に追い込まれる中で、原子力発電所の誘致により、地域経済の復興を図った。ハワイ移民も盛んで観光業ではフラダンスも地元根付く。沖合

は黒潮と親潮との合流地点であり、太平洋の海洋資源の生態系や、その持続的利用を考えるうえでも、Post-Fukushima が人類の将来の鍵を握る。

水半球たる環太平洋の円環とその半球内に点在する無数といってよい島嶼と——。その生態学的な意味を包括的に探ることは、それ自体、ユーラシア大陸の東端、太平洋の西北端で4つのプレートが競合して沈み込む地殻の上に生成した島国の命運を、地政学的な視野から考察するためにも、必須の作業となる。それは地学・生物学から環境学、港湾都市比較文化史や資源・交易の経済史、国際関係論や政治外交史、文化交流史までを包摂する。ここに、第4期中期計画を迎える国際日本文化研究センターの、惑星の次元の責務を捉えなおすことは、誇大妄想などとは無縁の、極めて現実的な「国際的」「学際的」かつ「総合的」な課題であるはずだ。

国際日本研究と Japanese studies を架橋する——序に代えて……牛村 圭 i

第 I 部 環太平洋学術交流の可能性

越境する知的交流——共存と未来を考える……………	徐 興慶 3
東アジアと東南アジアの日本研究者間における 学術交流の可能性……………	鄭 炳浩 19
Challenges and Changes in Society 5.0: An Indonesian Perspective on Japan……………	Julian Aldrin Pasha 25
Society 5.0 における課題と変容——インドネシアの視点から みた日本の事例（日本語訳）……………	ジュリアン・アルドリン・パシャ 37
オーストラリアにおける日本研究の現状……………	ロウイーナ・ウォード 43
ニュージーランドにおける日本研究 ——その概観と共同研究の可能性……………	将基面貴巳 48
Centering Hawai'i: As Base for Collaborative Research on Asian-Transpacific Empires and Diaspora……………	Andre Haag 58
アジア・環太平洋地域の帝国とディアスポラに関する 共同研究基盤としてのハワイ（日本語訳）……………	アンドレ・ヘイグ 69
ラウンドテーブル「環太平洋学術交流の可能性」を終えて ——ディスカッサントの立場から……………	横溝 博 80
国際日本研究の「挑戦」と「機会」……………	園田茂人 87
〔コラム①〕 徐興慶先生の学問と実践 ——「国際日本研究」コンソーシアムに先駆けた人……………	伊東貴之 95
〔コラム②〕 太平洋戦争の記憶と歴史を可視化する ——南太平洋から見る東アジア……………	西野亮太 101

〔コラム③〕 シドニーの「ジャパン・スーパーナチュラル」展

に関わって…………… 安井眞奈美 107

第 II 部 国際日本研究の課題と展望

東京外国語大学における「国際日本学」……………	友常 勉 117
教育実践としての国際日本学の可能性と課題 ——明治大学国際日本学部の場合……………	張 競 125
「国境なき日本研究」へ向けて……………	アンジェラ・ユー 139
名古屋大学の国際日本研究と教育における課題と取り組み……………	近本謙介 145
パネルディスカッション「国際日本研究の課題と展望 ——コンソーシアム加盟機関の現場から」コメント……………	河野貴美子 154
〔コラム④〕 「教育」としての国際日本研究……………	瀧井一博 162
〔コラム⑤〕 海洋と環太平洋・島嶼を視野におさめた次世代の 研究計画に向けて——総括討論の司会をつとめて……………	稲賀繁美 166

付録 「国際日本研究」コンソーシアムについて

設立の経緯と趣旨……………	175
活動の記録 2020年4月-2021年3月……………	178
会員機関一覧……………	181
会員機関紹介① 東京大学国際総合日本学ネットワーク（鍾 以江）……………	182
会員機関紹介② 京都大学アジア研究教育ユニット（落合恵美子）……………	184
あとがき……………	荒木 浩 186
執筆者一覧	

【編著者（「国際日本研究」コンソーシアム）】

荒木 浩（あらか ひろし）

国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授
『古典の未来学』（編著）文学通信、2020年

白石恵理（しらいし えり）

国際日本文化研究センター助教
『越境する歴史学と世界文学』（坪井秀人・瀧井一博・小田龍哉と共編）臨川書店、2020年

松本裕美（まつぎ ひろみ）

国際日本文化研究センター助教
« Le jardin japonais comme champ des enjeux internationaux: tendances récentes de la recherche. » *Perspective* 2020-1, pp. 257-66.

ゴウランガ・チャラン・プラダン（Gouranga Charan Pradhan）

国際日本文化研究センター機関研究員
「投企された『英訳方丈記』——夏目漱石の「作家論」から「天才論」へ」
荒木浩編『古典の未来学』文学通信、2020年、577-593頁

かんたいへいよう にほんけんきゅう かんが
環太平洋から「日本研究」を考える

Japanese Studies: Perspectives from the Pacific Rim
——「国際日本研究」コンソーシアム記録集2020（非売品）

2021（令和3）年3月31日初版発行

編 集 「国際日本研究」コンソーシアム

制作協力 Shibunkaku Works

発 行 国際日本文化研究センター
〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町3-2

装 幀 尾崎閑也（鸚草デザイン事務所）

印 刷 株式会社 思文閣出版 印刷事業部
製 本

ISBN（紙）978-4-910171-00-5 （電子）978-4-910171-01-2

© 2021 「国際日本研究」コンソーシアム



Japanese Studies:
Perspectives from
the Pacific Rim



「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies

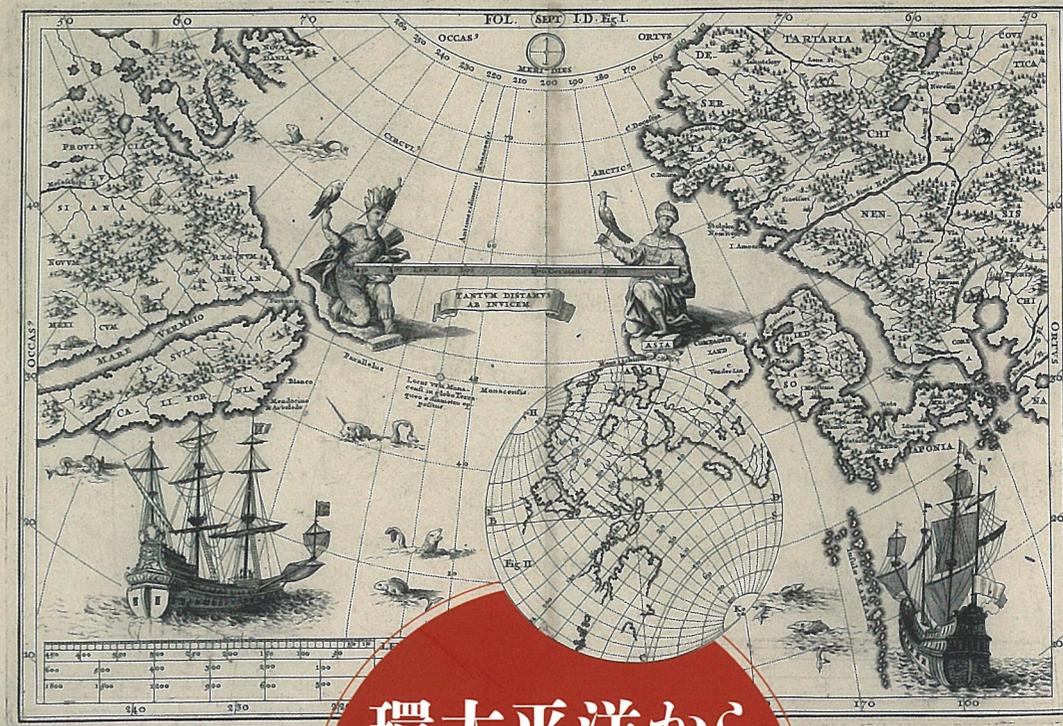
ISBN978-4-910171-00-5

環太平洋から「日本研究」を考える



「国際日本研究」コンソーシアム [編]

国際日本
文化研究
センター



環太平洋から
「日本研究」
を考える

「国際日本研究」コンソーシアム
[編]

Japanese Studies:
Perspectives from the Pacific Rim

国際日本
文化研究
センター